宮崎大学学術情報リポジトリ
University of Miyazaki Academic Repository

教員養成課程の合奏授業におけるアクティブ・ラーニング 学生による基礎練習教材作成の試み

メタデータ	言語: jpn
	出版者: 宮崎大学教育学部
	公開日: 2016-08-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 浦, 雄一
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/5975

宮崎大学教育学部紀要　芸術・保健体育・家政・技術　第88号（2017）1-11頁

教員養成課程の合奏授業におけるアクティブ・ラーニング
学生による基礎練習教材作成の試み

浦　雄一

Active Learning in Instrumental Ensemble Classes: Guiding Students to Create Etudes

Yuichi URA

1 はじめに

高等教育におけるアクティブ・ラーニングが重視されるようになって久しい。宮崎大学においても，第３期中期計画の中で「主体的に学習し，かつ実践的な経験に裏付けられた確かな課題解決能力を持つ学生の育成に向け，平成30年度までにカリキュラムの70％程度の科目にアクティブ・ラーニングの教育方法を導入する[1]」と示されている。

筆者は平成25年４月以来，７学期に亘って宮崎大学教育文化学部（現・教育学部）学校教育課程における合奏授業科目を担当し，吹奏楽形態での授業を行ってきた。学期毎に改善を重ね，アクティブ・ラーニング的コンテンツの導入を進めている。特に，平成28年度前期には，学生が自身およびパート内メンバーの技術向上を目的とした「基礎練習教材」を作成するという取り組みを試みた。本稿ではその実践結果を示した上で，教育的効果について考察する。

2 実践の概要

「総合器楽合奏演習」では，経験の有無に関わらず，全員が少なくとも１種類の管楽器を練習して吹奏楽形態の合奏を行い，期末試験としての発表会における公開演奏を到達目標としている[2]。基礎練習教材作成の実践は，平成28年度前期「総合器楽合奏演習I」を受講または聴講した学生24名のうち，新１年生および大学院生等を除く16名を対象として行った[3]。

---

[1]「国立大学法人宮崎大学の中期目標を達成するための計画」2016年９月８日閲覧 http://www.miyazaki-u.ac.jp/guide/files/chukikeikaku20160331.pdf.

[2]打楽器については，発表会の数週間前より，宮崎大学吹奏楽部および宮崎大学管弦楽団の有志がサポートメンバーとして参加している。

[3]本科目では，単位を必要としない学生の聴講を認めており，演奏への参加も許可している。以下，正規受講生と聴講生を総称して「受講生」と記す。

この学期に使用した楽曲は次の２曲である。難易度はいずれもGrade 1 に分類されている[4]。

1）Douglas E. Wagner 編曲 *Siyahamba*（Belwin Mills Publishing, 2006）
2）Larry Clark 作曲 *Contredanse*（Belwin Mills Publishing, 1998）

今回の試みは，各楽曲の断片（fragments）を題材として，受講生自身が基礎的奏法の向上を目的とした練習教材を作成する（編曲する）というものである。この取り組みは，全15回の授業のうち第２回から第９回に亘って実施した。

表１．平成28年度前期「総合器楽合奏演習I」授業概要[5]

	基礎練習教材作成に関わる内容	その他の主な内容
第１回		・　楽器体験 ・　管楽器経験および希望楽器に関するアンケート
第２回	・　課題内容発表 ・　基礎練習方法をテーマとしたディスカッション	・　担当楽器発表
第３回	・　課題①提出	・　チューニング（B♭）の練習
第４回	・　課題①返却	・　パート練習（楽曲①） ・　パート練習成果発表会
第５回	・　課題①再提出 ・　課題②提出	・　パート練習（楽曲①②）
第６回	・　課題②返却	・　木管/金管分奏（楽曲①）
第７回	・　課題②再提出	・　パート練習（楽曲①②）
第８回	・　課題②演奏発表（パートごと）	・　パート練習（楽曲②）
第９回	・　課題①演奏発表（パートごと）	・　パート練習（楽曲①）
第10回		・　木管/金管分奏（楽曲②）
第11回		・　木管/金管分奏（楽曲①②）
第12回		・　全体合奏（楽曲①②，管楽器のみ）
第13回		・　全体合奏（楽曲①②）
第14回		・　全体合奏（楽曲①②）
第15回		・　発表会（期末試験）

[4] Ed. Richard Miles and Thomas Dvorak, *Teaching Music through Performance in Beginning Band* (Chicago: GIA, 2001), vi. “Siyahamba," in *Teaching Music through Performance in Beginning Band* vol. 2,ed. Richard Miles (Chicago: GIA, 2008), 369.

[5] 表中では便宜上，*Siyahamba*を「楽曲①」，*Contredanse*を「楽曲②」，各曲に基づく基礎練習教材作成課題をそれぞれ「課題①」「課題②」と表記している。

作成を課した教材数は，楽曲自体が比較的短い*Siyahamba*に基づく教材が３題，*Contredanse*については５題である。各教材の長さは４～８小節程度とした。提出にあたっては，作成した教材が楽曲のどの部分に対応しているか（小節番号）を明示するほか，「作成の意図・目的」「初学者に有効だと思う理由」等についても自由に記述するよう指示した。

尚，本科目で合奏に使用している管楽器は次の通りである: フルート，クラリネット（B$^{\flat}$，バス），サクソフォン（アルト，テナー，バリトン），トランペット，ホルン，トロンボーン，ユーフォニウム，チューバ。

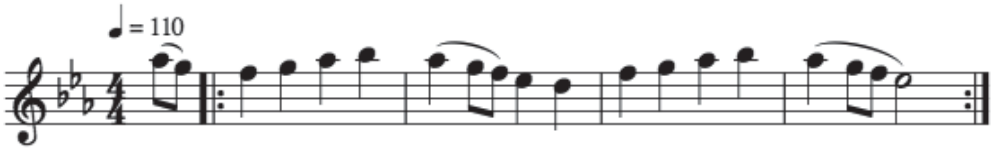
3 受講生による基礎練習教材作成

以下は，受講生が実際に作成した基礎練習教材の例である。作成の意図・目的といった受講生自身によるコメントに続けて，譜例を示す。

3.1 フルート

3.1.1 *Siyahamba* 第40小節以降に基づく教材

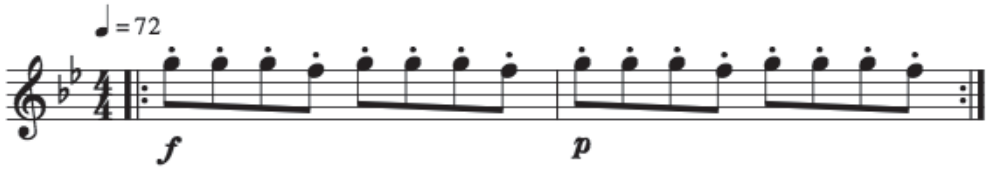
「音の移り変わりの練習。少しテンポ速めに設定し，指をすばやくうごかせるようにする練習。」（中学校教育コース３年/フルート歴１年）



譜例１． *Siyahamba*に基づく基礎練習教材（フルート）

3.1.2 *Contredanse* 第39小節に基づく教材

「スタッカート。音量が *p* になったとき，*f* のときと同じ響きになるように。」（初等教育コース２年/フルート歴７年）

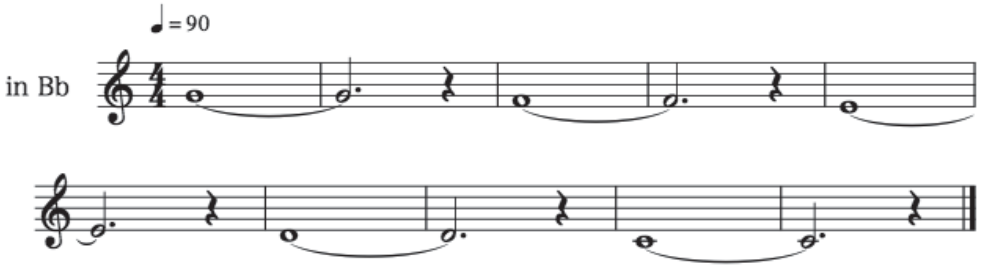


譜例２． *Contredanse*に基づく基礎練習教材（フルート）

3.2 クラリネット

3.2.1 *Siyahamba* 第５小節以降に基づく教材

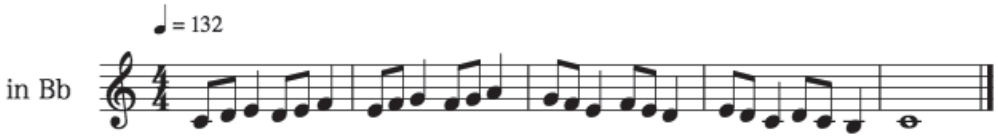
「ロングトーンの練習。音を安定させて，まっすぐ伸ばすための練習。のばす間に音が揺れないかしっかり聴く。息の吐き方にムラがないよう，同じように吐く。」（中学校教育コース２年/クラリネット歴１年）



譜例３．*Siyahamba*に基づく基礎練習教材（B♭クラリネット）

3.2.2 *Contredanse* 第49-54小節に基づく教材

「近くの音をすぐに指運びできるようにする練習。」（中学校教育コース３年/クラリネット歴８年）

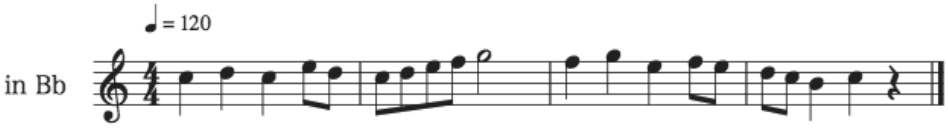


譜例４．*Contredanse*に基づく基礎練習教材（B♭クラリネット）

3.3 サクソフォン

3.3.1 *Contredanse* 第９-17小節に基づく教材

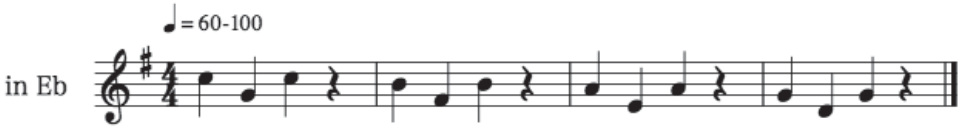
「オクターブキーを使う。」（初等教育コース３年/サクソフォン歴１年）



譜例５．*Contredanse*に基づく基礎練習教材（テナーサクソフォン）

3.3.2 *Contredanse* 第２小節以降に基づく教材

「４度進行で低くなるにつれて難しくなるので，少しずつならして速くしていくといいと思います。」（中学校教育コース３年/サクソフォン歴５年）

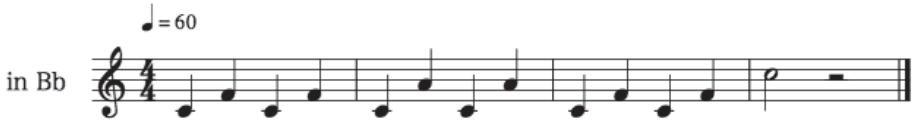


譜例６．*Contredanse*に基づく基礎練習教材（バリトンサクソフォン）

3.4 トランペット

3.4.1 *Siyahamba* 第６－７，14-15小節に基づく教材

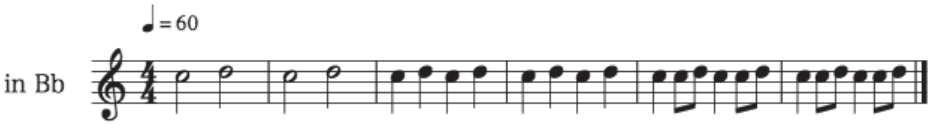
「曲の中の［記音］CからF，Aへの跳躍をきれいに吹くため。」（中学校教育コース３年/トランペット歴４年）



譜例７．*Siyahamba*に基づく基礎練習教材（トランペット）

3.4.2 *Contredanse* 第53小節に基づく教材

「音の切り換えを早くする練習。」（中学校教育コース２年/トランペット歴１年）

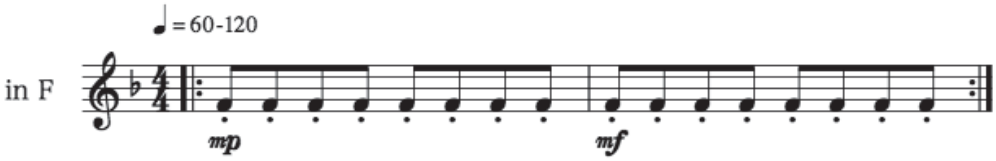


譜例８．*Contredanse*に基づく基礎練習教材（トランペット）

3.5 ホルン

3.5.1 *Contredanse* 第25-32小節に基づく教材

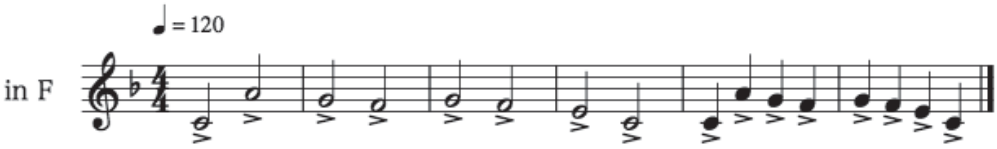
「初めはスピードを遅めにし，スタッカートが確実にできるようにする。お腹をしっかり支え，布に針を通すようなイメージで息を強く入れる。息つぎ後の音をしっかりあてる。」（中学校教育コース２年/ホルン歴半年）



譜例９．*Contredanse*に基づく基礎練習教材（ホルン）

3.5.2 *Contredanse* 第37-39小節に基づく教材

「［曲中では］四分音符であるが，音をしっかり当てさせるため，初めは二分音符で吹く。」（同上）

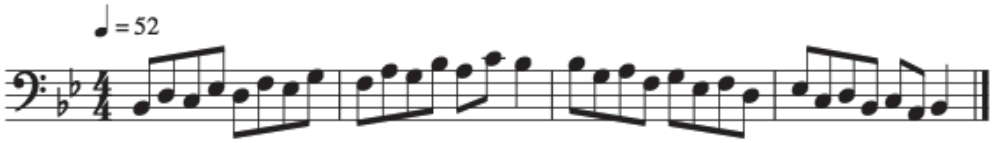


譜例10．*Contredanse*に基づく基礎練習教材（ホルン）

3.6 トロンボーン

3.6.1 *Contredanse* 第10小節以降に基づく教材

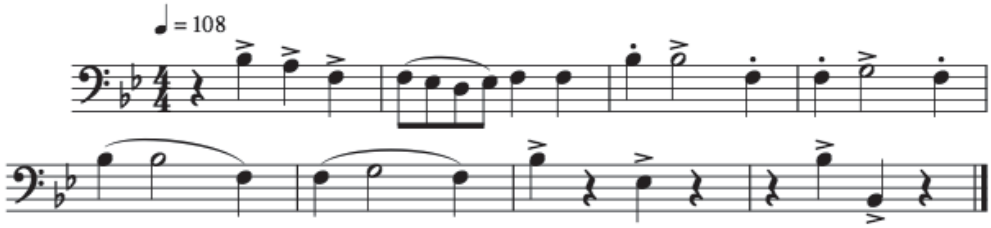
「３度の動きが曲中に出てくるので，ポジションを覚えるようにするため。」（中学校教育コース２年/トロンボーン歴９年）



譜例11. *Contredanse*に基づく基礎練習教材（トロンボーン）

3.6.2 *Contredanse* 第70-78小節に基づく教材

「アクセント，スタッカートとスラーの変化を意識した練習。」（中学校教育コース３年/トロンボーン歴半年）

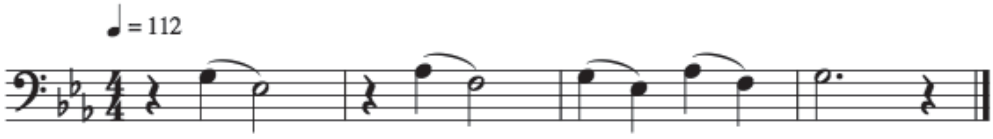


譜例12. *Contredanse*に基づく基礎練習教材（トロンボーン）

3.7 ユーフォニウム

3.7.1 *Siyahamba* 第23-30小節に基づく教材

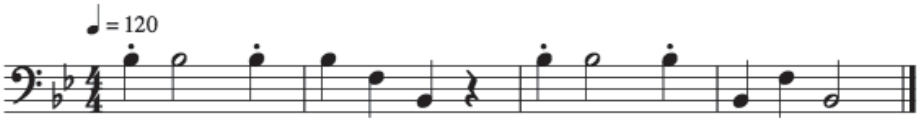
「２音をスラーでつなげられるように。」（初等教育コース１年/ユーフォニウム歴３年）



譜例13. *Siyahamba*に基づく基礎練習教材（ユーフォニウム）

3.7.2 *Contredanse* 第72小節以降に基づく教材

「スタッカートとそうでない音の区別をはっきりする。シ^{b}からファのなめらかな音移動。」（同上）

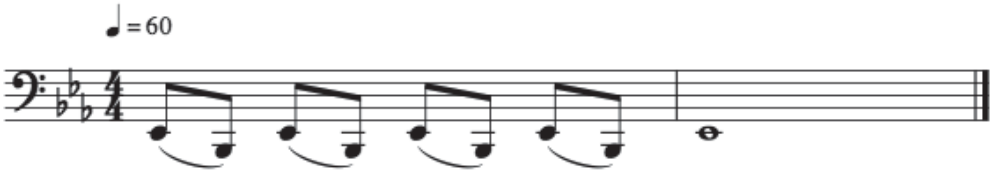


譜例14. *Contredanse*に基づく基礎練習教材（ユーフォニウム）

3.8 チューバ

3.8.1 *Siyahamba* 各小節の３，４拍目に基づく教材

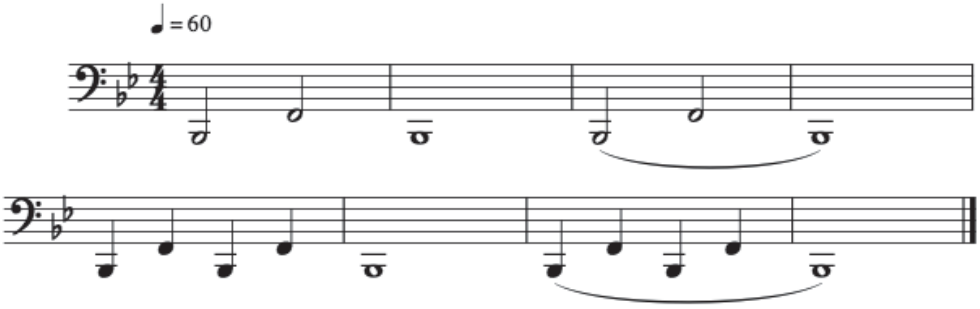
「E♭とB♭の音の移動をスムーズに行うため。全体的にE♭とB♭の音の移動が多いので。」（学校教育課程以外２年/チューバ歴７年）



譜例15. *Siyahamba*に基づく基礎練習教材（チューバ）

3.8.2 *Contredanse* 第７，８，16，24，40，56小節に基づく教材

「B♭とFのインターバルとリップスラー。初めのうちはLow B♭が出しにくいので，あえてLow B♭から始める。」（同上）



譜例16. *Contredanse*に基づく基礎練習教材（チューバ）

４受講生自身による事後評価

第８回および第９回の授業において，作成した基礎練習教材をパート全員で練習し，演奏発表して聴き合うという活動を行った。これらの授業直後に受講生自身が行った事後評価（自由記述）には，以下のようなものがあった。

4.1 基礎練習教材を作成した受講生による事後評価

「スタッカートの練習ですごくいい練習にはなったのですが，間を入れずに*f* と *p* をきりかえるというのは初心者には少し難しかったなと思いました。」（フルート歴１年）

「全員で合わせたときに，どうしてもブレスによって音の処理と次の音の入りが合わないので，ブレスのための休符をつくるべきだと思いました。」（フルート歴７年）

「自分が考えたものは基本的に楽器を吹き始めたばかりの人にとっては難しかったので，もう少しテンポダウンできればと思いました。」（クラリネット歴８年）

「自分たちで作った基礎練をやってみて，曲を練習する時と違った意識が持てるので良いと思いました。」（クラリネット歴１年）

「自分のつくった基礎練習は少し簡単すぎて,［楽曲の演奏に］直結するというところまでいってなかったので,ブレスの仕方,タイミングなども合わせるところまで考えなくてはいけなかったと思いました。」（サクソフォン歴５年）

「音の跳躍のためのやつは，跳躍しすぎて実際に吹くときついことが分かったので，間に中間の音を入れればもっと吹きやすくて且つ，音をなめらかにきれいに吹く練習ができるんじゃないかと思いました。」（トランペット歴４年）

「発表会で吹いてみて，音の出るところ，出ないところの差が極端だったので，［２種類の教材を用いて，１つ目で］ロングトーンでしっかりと口をあたためて，［２つ目で］速いパッセージにいくなど，工夫をすればいいかなと思いました。」（トロンボーン歴半年）

「次の音にスムーズにきれいにうつる練習があり，本番ではうまくいきませんでしたが，練習の中でかなり効果的だったように思います。音の番号［ポジション］もあいまいだったところがあったので，それも練習になりました。」（トロンボーン初学者）

4.2 基礎練習教材を作成していない受講生による感想

「強弱の練習が難しかったけれど,とても練習になると思いました。オクターブ下の音が鳴ってしまうので気をつけたいです。」（フルート）

「［ロングトーンの練習は］息の量などの調節の練習にもつながってとても良かったです。指の運びを安定させる練習では，３つの連続した音を使って，一音一音なめらかに吹く練習にもなって良かったです。」（クラリネット）

「強弱やタンギングなど，自分ができないところが何かを知ることができるので，やっぱり基礎練習が大切だと感じた。」（クラリネット）

「同じ旋律を速さを変えて練習することが効果的だと思いました。また，つくった基礎練をどの順番で練習していくかも，早く上達するために必要な視点ではないかと思いました。」（クラリネット）

「基礎練はよく考えられていると思います。ただ，あまり考えて吹けていないような気がします。」（サクソフォン）

「音高を変えずにテヌート，スタッカートなど吹き方を変える練習をすることによって，確実になるまで練習することができました。強弱の指示があると，音のスピード感や音色，タンギングが鍛えられてさらによくなると思います。」（トランペット）

「しっかり書けていたと思うが，もう少し，初心者にしっかり何かを体得させられる練習が書けていれば良いのではないかと思った。」（ホルン）

5 考察

今回実践した取り組みは，まず楽曲の断片を用いた基礎練習教材を受講生自らが作成し，次にパートごとの演奏発表を行う，というごくシンプルなものであった。しかしながら，各受講生は，教員からの直接的な指示があったわけではない活動も含め，図１のような過程を経て本課題の実施を完了したものと考えられる。

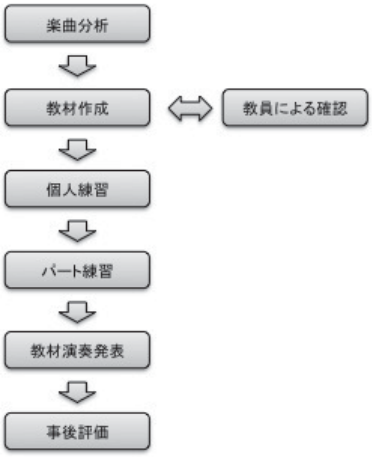


図１．課題実施の流れ

履修生は，基礎練習教材作成に先立って，期末試験での演奏を予定している楽曲の簡易な分析を行う必要があった。上記「３受講生による基礎練習教材作成」で挙げた各受講生のコメントは，初学者にとってつまずきの原因となり得る音楽的要素を抽出し，問題解決の助けとなる教材を作成しようとした意図を示している。次のグラフは，各要素について，それぞれに着目した受講生の人数を表したものである。

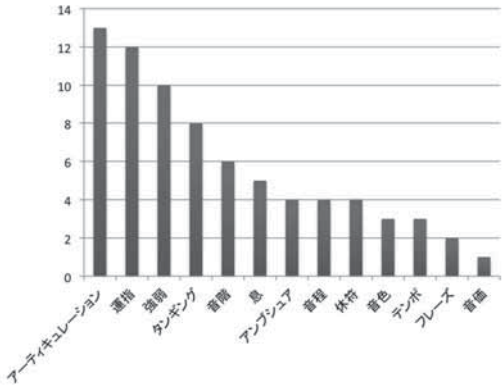


図２．各要素に着目した人数（N=16）

アーティキュレーション（「スラー」「スタッカート」「アクセント」等を含む），運指（「ポジション」「フィンガリング」「音の移動」等を含む），強弱（「*p*」「*f*」「クレッシェンド」等）およびタンギングについては，対象とした受講生のうち半数以上が着目している。

各受講生は，自身の楽典的知識および管楽器奏者としての経験を踏まえて課題を発見し，その解決を目的とした教材を作成した（Plan）。その後，実際にパート練習等を経て演奏し（Do），事後評価を行った（Check）。さらに，今回は授業時間の都合により実施しなかったが，「4.1 基礎練習教材を作成した受講生による事後評価」に挙げたような反省（「初心者には少し難しかった」「実際に吹くときついことが分かった」等）を生かして修正する（Act）ことも可能である。

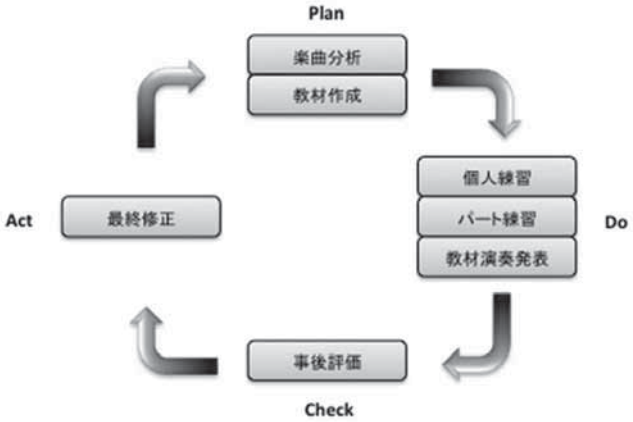


図３．基礎練習教材作成を出発点としたPDCAサイクル

一方，「4.2 基礎練習教材を作成していない受講生による感想」では，自己の演奏に対する反省（「オクターブ下の音が鳴ってしまうので気をつけたい」「速さを変えて練習することが効果的だと思いました」等）が多く見られた。これらを踏まえて，より高いクオリティを目指した演奏，またそのための練習を行うことも可能である。合奏授業科目の到達目標である公開演奏の質向上を図る，さらに実践的なアクティブ・ラーニングとして捉えることができるだろう。

6 おわりに

アクティブ・ラーニングによって学生は「学び方を体得する」ことができ，教員を始め，どのような職種にあっても必須とされる重要なスキルを身につけることができる。学生の将来像が多様化してきている現在，宮崎大学が掲げる「カリキュラムの70％程度の科目にアクティブ・ラーニングの教育方法を導入」という目標の早期達成が望まれるところであり，筆者も一教員として引き続き努力したいと思う。

アクティブ・ラーニングは決して学生を「放ったらかし」にしてよいものではなく，教員による綿密な授業計画および適切な助言が必要であることは言うまでもない。今回の実践においては，本編では本題から逸れるため言及しなかったが，「５ 考察」図１に示した「教員による確認」を行った際，記譜法に関する知識が曖昧な学生が複数いることが明らかになった。このよ

うに,「従来型」授業で学生が修得した知識の確認，実践，応用の場としてもアクティブ・ラーニングを活用し，関連する他科目との連携をさらに深めていくことが今後の課題である。

参考文献

Miles, Richard, ed. *Teaching Music through Perf ormance in Beginning Band*, vol. 2. Chicago: GIA, 2008.

Miles, Richard and Dvorak, Thomas, ed. *Teaching Music through Performance in Beginning Band*. Chicago: GIA, 2001.